

「東京新聞」の「平和の俳句」は多くの読者を得ている。平和を求める人々の思いを込めた句は心を打つ。私も真っ先に読んでいます。8月に掲載された句から。「沖縄を泣かせて平和来ませんよ 佐野仁（ひとし）（75歳）」<金子兜太 沖縄に米軍がたくさん駐留し、人権無視の事件が起こる。今の政治が悪く見えて、これでは真の平和が来ていないと思う。同感。> 1969年4月28日だったと思うが、沖縄の本土並み返還を求める「沖縄デー」の集会在代々木公園で行われた。その時、私は「沖縄の犠牲の上に、本土安泰を貪るな」と書いたプラカードをもって参加した。佐野氏が詠んでいるように、沖縄を泣かせる構造は今も全く変わっていない。政治による構造的差別という他ない。

「武器いらぬ言葉の武器もなくしたい 中川敬翔（15歳）」<いとうせいこう どちらの武器も人を傷つけ、支配する。平和な世でも言葉の武器を捨てよ。> <金子兜太 まったく賛成。言葉の武器には十分に注意を。使わないことを心がけよう。> 15歳の中川君が「言葉の武器もなくしたい」と詠むのが、素晴らしい。人殺しの武器はまっぴらであるが、最近では、言葉の武器も恐ろしく思う。「ポスト・トゥルース（脱真実、超真実）」が認定された言葉になるほど、言葉の力が失せ、逆に、言葉の暴力が蔓延している。私は、真実な言葉が平和を作っていくと信じている。

「共謀罪三鬼不死男（さんきふじお）を又（また）泣かす 汲田隆（旧字）彦（77歳）」<いとうせいこう 戦前に新興俳句への理不尽な弾圧があった。時代はまず俳句にやってくる。西東（さいとう）三鬼、秋元不死男を泣かせた圧力に目を光らせたい。> 汲田氏は、政治・社会を風刺する一コマ漫画を半世紀に渡って描き続けてきた漫画家である。「三鬼不死男」は俳人の西東三鬼と秋元不死男のことで、二人は1940年代、治安維持法で検挙された。俳句界に弾圧を加えた戦中のように、共謀罪法が又、人を泣かすのではないかと恐れた句である。「口つぐむ民になるまじ六・一五 宮崎齊子（せいこ）（57歳）」<いとうせいこう 共謀罪の余波は次々と国をむしばむだろう。抵抗の一步ずつが大事。> <金子兜太 まったくその通り。それだけに慎重かつ大胆に振る舞うこと。> 6月15日は参議院本会議で共謀罪法が成立した日である。この日が、口をつぐむ恐怖につながる日の初めにならないよう、平和を作り出す言葉をつむぎ出していく日にしたいものである。

「駅前立つ吾（あ）励ます声涼し 浅岡喜美子（71歳）」<いとうせいこう 一昨年の夏から毎週金曜日の夕方、豊橋駅前でスタンディングをし、戦争に反対し続けている七十一歳の女性。励ます声が力になる。> 澤地久枝氏の呼びかけを受け、私たちも毎月の3日に「九条の会」ののぼりを立て、金子兜太氏が書いた「アベ政治を許さない」のプラカードを持ち、港南台駅前でスタンディングをしている。時々、励ましを受け、嬉しく思う。

「平和の俳句 戦後72年」の「記者の『一句』」から。「何故と瞳（め）が問いかけてくる戦禍の子 小川仙太郎（73歳）」どこの「戦禍の子」だか分からないが、シリアで爆撃に晒された子どもたちの瞳を連想した。彼らの受けた恐怖のトラウマは容易に消えることはないだろう。大人たちの罪が子どもたちに癒し難い深い傷跡を残している。

「こんな中慰まるるや慰霊の日 原口朝美（42歳）」毎年、慰霊の日には式典が行われる。天皇は「深い反省」と言う。安倍首相はきれいな言葉を並べるが、アジアへの加害責任については一言もない。「秘密保護法」「安保関連法」「共謀罪法」を成立させる今、戦死者たちは慰められてはいないだろう。過去を知る者が今を知り、未来の展望を持つ。